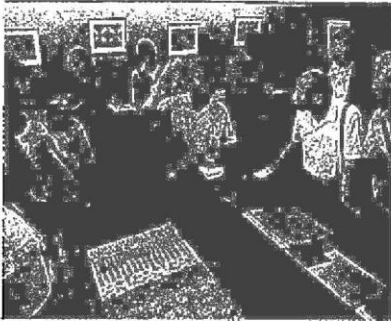


蛭谷和紙伝承協議会

製品開発へ本格活動

国指定の伝統的工芸品「越中和紙」の1つの「蛭谷和紙」(朝日町)の復活を目指す、今年3月に発足した「蛭谷和紙伝承協議会」が活動を本格化させている。今月中にも和紙製造者として県和紙協同組合への加盟を申請する予定で、11日には、製品開発などに役立てようと、富山市内の



八尾和紙について桂樹舎の吉田泰樹社長(中央)から説明を受ける蛭谷和紙伝承協議会のメンバーら(富山市八尾町鏡町)

和紙工房を視察した。

視察は、蛭谷和紙のブランド化を目指す朝日町が、同協議会に製品開発や販路開拓を模索してもらおうと企画。同協議会の長崎喜一会長(76)ら蛭谷地区の住民10人が、富山市八尾町鏡町の和紙工房「桂樹舎」を訪れ、ギャラリーや紙すき工房を見学した。

同組合理事長でもある桂樹舎の吉田泰樹社長(64)は、和紙を取り巻く現状について、「需要は少なく、生産者は全国にいる。そこに入っていくのは簡単ではない」と説明。「地に足をつけて販路を開拓する必要がある」と指摘した。吉田さんの話を聞いて長崎さんは、「今まで少し簡単に考えていた。大変な仕事だと改めて感じた」と話した。越中和紙は、高岡銅器や

井波彫刻などと共に、国が指定している県内の伝統的工芸品5品目の1つ。八尾、五箇山、蛭谷の3つの産地を総称して「越中和紙」と言われる。(高津守)